

『一握の砂』の位置

窪田章一郎

石川啄木に対する評価は、細部にわたっては研究家によって見解を異にしており、また問題として残されているものがあるが、短い全生涯の文学史的位置づけについては、綿密な研究によって定説というべきものができている。

中野重治は△啄木が貧乏なほど次ぎへ次ぎへと移って行ったことは、『明星』派を捨て、「自然主義派」を捨て、行わけの歌の書き方に行ったその行き方にもあらわれている。しかも啄木が自身自身の道として見つけて行ったものは、時代全体のなかで客観的に最も新しいものであった。最も本質的なものであった。▽そして、△自分自身のもの▽へ△直線的に進んで行▽き、△その辿りついたところは、歴史的に新しく、歴史的に本質的だったのである。言いかえれば、啄木の最後の到達点は、その完全な解決を今日に、また今日以後に残しているほど、それほど四十年前にすでに新しかった▽し、△それ以上のことは歴史によらねば解決できぬところまで一人で持って行った▽と言っている。このような

見解は、今日一般に承認されている代表的なものであらう。

また、桑原武夫は△明治以後の日本文学で、天才という言葉が一番ピッタリするのは啄木だという気がする。私だけではあるまい▽と言ひ、天才という点については、△過去の伝統にしばらくは受け入れられず、いな迫害すらされ、孤独に追いこまれる芸術家▽だとし、△社会と個人とが調和しているかぎり、あるいはその矛盾が自覚されぬかぎり、天才という観念は生じえなかった▽と言っている。そして啄木は△その矛盾を自覚し、めぐまれぬ条件の下で、これを追求してやまなかつた珍らしい一人であ▽り、その仕事がその時代だけのものではあれば天才という感を覚えさせないが、△啄木は今日も新し▽く感じられる。すなわち、△私たちはそれが私たちの過去にあったものとは思えず、私たちの現在に同時にある。いや未来にも及んでいるのかも知れぬ、そういう気持からのがれられなくなつてしまふ▽と言っている。これもおなじ主旨を述べたもので、啄木についての代表的な文学史の見解として承認されるものであらう。

窪田空穂が大正三年、雑誌『国民文学』を創刊したとき、その号で「一般に勧めらるる歌集」という文章を「一記者」として書いているが、『啄木歌集』一冊のみを採りあげている。当時の短歌が多かれ少なかれ情趣生活に足を踏み込んでゐるのに対し、それを切り捨てて新しい表現とした点を認めている。初期『明星』からはやく離れて、自分自身の道を求めた空穂の立場での共感があつたのである。

以上の啄木についての評価は、主として明治四十一年以後を対象としており、『一握の砂』『悲しき玩具』などの歌集「食ふべき詩」「時代閉塞の現状」などの諸評論、『呼子と口笛』に収められた数篇の詩によって示された文学に対してである。啄木の十年足らずの文学活動は、中野の言うように一直線であり、最も本質的な問題にむかつて最短距離を高く飛翔したのである。ことに四十一年以後はすさまじいまでの速度をもつてしたのは、天才の資質によらなくては成し得ないことであつた。啄木の文学が今日も新しいという中野・桑原の見解は、自然主義文学の行きづまりを、社会主義的立場から打開するよりはか方途のないところまで突きつめてゐる点に中心がしぼられてゐる。空穂が『啄木歌集』を新しい表現だと認めるのは、人事や生活を対象として人間心理を集中的に歌つたこと、そのために必要であつた口語的発想と、自由・平明な表現を実現したことにあつたであらう。言いかえれば、旧派の積年の情趣生活の歌を打倒した『明星』歌風が、新しい情趣生活に捉われたのを更らに否定することであつた。詩から自然主義の小説へ、そしてふたたび短歌へかえるコースとなり、啄木は

評者の空穂と類似する点があつたのである。

以下、啄木が新しい歌風を形成した『一握の砂』にいたるまでについて考えてみようと思う。

二

『一握の砂』は、序文によると「明治四十一年夏以後の作一千余首中より五百五十一首を抜きてこの集に収む。」とあり、四十三年十二月、東雲堂書店から刊行され、啄木の生前に書物となつた最後のものではあつた。この歌集の成立事情については岩城之徳の研究に詳しい。最初の計画では書名は『仕事の後』であり、四十三年四月四日から十一日にかけて、二百五十五首を選んで編集したが、春陽堂から断わられて刊行が実現しなかつた。ついで十月四日、東雲堂と出版契約ができた。その歌集名は『仕事の後』であり、取められた短歌は四十一年六月二十三日から四十三年八月四日までの作、四百首前後で、一行書きであつた。ところが契約のできた直後の九日までの間に、原稿から三、四十首をけずり、七、八十首を加え、三行書きに改めて編集しなおし、書名を『一握の砂』と改めた。さらにまた、歌稿が印刷所に渡つたのち、大幅に短歌を増補して再編集し、五百五十一首とした本が、今日に伝わる『一握の砂』であるという。その最後の八首は、最初の校正刷の出た十月二十九日が、長男真一のわずか二十四日の命で没した葬儀の日に當つており、その死を悲しむ歌を追加したものである。東雲堂に出版の交渉をしたのは、妻節子の出版費を必要としたためであつた。序文によると、それまで多大の恩を受けた宮

崎郁雨、金田一京助の二友人に捧げるとともに、亡兄に手向けている。稿本書肆に渡したのは、その生まれた朝、稿料はその葉餌とし、見本刷を見たのは火葬の夜であったと、沈痛な文章が添えられていて、はからざる悲しい体験が、処女歌集出版の喜びをおおったのである。

以上の編集事情によると、一行書きが土岐哀果のNAKIWARAIに暗示をうけて三行書きに変えられ、再三編集を改めて校正の日まで作品が追加されている。ここにも啄木が貪婪なまで次ぎへ次ぎへと移った文学的執念の強かったことが知られる。最初の『仕事の後』はいかなる内容か知ることができないが、もし春陽堂が希望の稿料を拒まずに刊行していたら、啄木の処女歌集はかなりなまでに内容の変わったものとなっていたであろう。

この内容については、収載作品の年代の調査からも推測される点がある。おなじく岩城之徳の報告によると、明治四十一年作六十四首、四十二年作二十九首、四十三年作三百二十七首、歌集に初出の作百三十一首、計五百五十一首となる。なお、初出の作が歌集編集当時のものと推定されるところから四十三年作とすれば四百五十八首となり、総歌数の八割三分強、という結果が示されることとなる。四十三年作が圧倒的に多いのである。しかもこの年の六月、日記に八幸徳秋水等陰謀事件発覚し、予の思想に一大変革ありたり。Vとあるように、啄木の文学態度が飛躍的に深化し、尖鋭となっている。四月に編集された『仕事の後』二百五十五首が、かりに明治四十一年、四十二年に敵しかったと仮定しても、なお『一握の砂』との内容上の相違は、想像するに難くない

ものがある。約半年間に、この歌集が成長変化した速度のいかにばげしいものであったかは、歌集の形態に認められる以上のものがある。

歌集の収載歌は少ないが、四十一年は爆発的に作歌欲の起った年である。伝えられる『明治四十一年作歌ノート』は『暇ナ時』と題がつけられ、歌数は六百五十一首ある。そのなかから採られたのは五十四首で、一割にも及ばないが、『一握の砂』の出発点として、きわめて注目されるのである。この年四月、約一年間の北海道での新聞記者としての放浪生活から離れて上京、五月から本郷菊坂の赤心館で小説に専心し、約一ヵ月に五篇三百枚を書いている。しかしその小説は一篇も雑誌に採用されず、生活苦のために自殺をも思った時期である。六月二十三日、作歌欲がにわかに起り、その夜から暁にかけて五十五首、二十四日は午前中に五十首、二十五日には百四十一首を詠み、そのなかから百十四首を選んで『石破集』と題して『明星』に発表した。一ヵ月ほどに三百枚の小説を書き、三日間に二百四十六首の短歌を爆発的に詠んだ文学活動は、啄木の生涯においてもっとも精神的な、異常な昂揚期であった。

これよりさき、三十八年五月には詩集『あこがれ』を刊行した。三十六年末から翌年へかけ、故郷浜民村でこれまで異常な作詩の昂揚期をむかえ、『明星』派の新進詩人として注目され、諸雑誌に発表し、十月末にはそれらの詩篇を刊行の目的で上京している。さらにさかのぼると、啄木が白蘋の名で短歌一首がはじめて『明星』に掲載されたのは、三十五年十月のことであった。その

月、十七歳で盛岡中学を中退、月末には上京して翌年二月まで滞在、新詩社を訪れてはじめて鉄幹・晶子に面会し、歌会にも出席し、新しい詩作を鼓吹されて帰郷した。その十二月が『あこがれ』の巻頭詩となった「愁調」五篇を『明星』に発表したことになるが、その前月、新詩社の同人に推挙され、新進歌人として認められるようになっていたのである。

『一握の砂』の作品がはじまるまでの文学的経歴をたどると、大体以上のようなコースであるが、これを別の面から要約すると『明星』創刊から百号をもって廃刊となるまでの全時期にあたることとなる。三十三年四月『明星』の創刊されたとき、中学三年生で、級友と文学のグループを作り、鉄幹の『東西南北』『天地玄黄』などを読んでいたが、二年上級の金田一京助が『明星』の誌友であることから、その翌年正月には、創刊号以後をはじめて借覧したということである。その勧めで啄木も誌友となったが、級友と同人雑誌を作り、『明星』に投稿することはなかったようである。この当時の短歌は、鉄幹、晶子調を出るものではなかった。しかし、『明星』にはじめて一首が掲載されてから一年後には新進歌人として認められ、さらに一年後には新進詩人として認められている。詩人としては、単に『明星』内部においてではなく、詩壇で注目されるにいたっている。『あこがれ』刊行の翌年、三十九年七月には小説「雲は天才である」を書きはじめ、つづいてこの年「面影」「葬列」を書き、「葬列」は『明星』に発表している。北海道時代はその翌年からで、その一年間は鬱勃たる創作欲を内部に秘めながら、自然主義文壇の強烈な刺激を外部からは受

け、貧窮生活に背水の陣をしいて小説家として立つ決心を固めて上京するのである。すでに『明星』の批判者の立場に変じているのであるが、その終刊号まで作品を発表し、その短歌は『一握の砂』の出発点となることとなった。

このコースは、少年時代に『明星』によって自我の解放のよこびを知り、詩人として認められ、やがて自然主義の洗礼を受けた小説をもって立とうとして『明星』の批判者となったことを語るものであるが、とくに詩と小説とは、『一握の砂』にどのように受けとめられ、また関わりをもっていたのか、という点が考えられなくてはならない。

三

第一に、『あこがれ』時代の詩については、啄木自身は四十二年十一月から十二月にかけて「東京毎日新聞」に発表した「食ふべき詩」のなかで、きわめて誠実に率直に自己批判をしている。その頃は朝から晩まで何とも知れぬものにあこがれていた心持はただ詩作によって幾分発表の路を得ていたが、その心持のほかに何も持っていなかった時代だといえるのである。そして、その詩は人空想と幼稚な言葉と、それから微弱な宗教的要素V、そのほかは因襲的な感情のみだったと説明している。しかし、その根柢には人実感Vはあったのである。ただ、それを表現するためには空想力をはたかせ、誇張しないと、人其感じが当時の詩の調子に合はず、又自分でも満足することが出来なかったVと言っている。『あこがれ』の詩は、日夏耿之介たちに模倣性が強調されて

いるが、それは啄木にかぎられたことではなく、当時の詩人がつぎつぎにそれを重ねていたといってもいい、いわゆる共通の詩情と、表現技巧とをもっていたのである。しかし模倣と言いきれない巧みさであり、模倣されたとみずからいう蒲原有明をも認めさせる表現力を、十九歳の啄木は持っていた。『一握の砂』の口語的発想と表現とに、その表現力の才能がすがたを変えて發揮された点は、客観的に認めることができると考えられるのである。啄木はこの短い文章のなかで、A微弱な宗教的要素Vを取り上げている。

A乃至はそれに類した要素Vと括弧をつけて注釈しているのであるが、当時の啄木が梁川、嘲風などの感化を受けて、自己の拡充を真剣に志向したのは、人間形成期に重要な要素となっている。

啄木はしばしばブライドの高い性格について語っているが、それは宗教的愛の自覚によって、この時期に強く確認されたものと思われる。しかし、詩そのものについてはA空虚の感Vを抱くようになり、それを深めたのは、父が寺を逐われ、啄木が浜民村小学校の代用教員をして一家の生活の責任者となったときであり、現実の生活はいやおうなしに空想家にとどまらせてはおかなかったのである。人の詩を読む興味もまったく失われたというのは、『あこがれ』刊行といくばくの隔りもない頃の激変した心境ということができる。A郷里から函館へ、函館から札幌へ、札幌から小樽へ、小樽から釧路へVと食を求めて放浪した時期になると、詩とはいっか絶縁状態にはいり、たまたま自分の詩を読んだという人に逢って昔の話をされると、A嘗て一緒に放蕩をした友達に昔の女の話をされると同じ種類の不快な感じが起ったVという名

文句をもって、その当時の実感を述べているほどである。かつての詩に覚えた空虚感、嫌悪の情に変化しているのであるが、それを言わせているのは、生活の変化にはかならない。動かし難い現実を認め、実感の尊重が意識されているのである。そして、その根柢には自己への愛情が『あこがれ』以来、いよいよ強烈に流れていたと思われる。『一握の砂』五篇の第一に据えられた「我を愛する歌」のA我を愛するV心は、もっとも啄木の本質を示すものとなっているのである。

四十三年十一月『創作』に発表された「一利己主義者と友人との対話」の終りの部分で、Aそうさ、一生に二度とは帰ってこないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。(中略)歌という詩形をもつてということとは、われわれ日本人のすこししかもたない幸福のうちの一つだよ。おれはいのちを愛するから歌をつくる。おれ自身が何よりもかわいから歌をつくる。(下略)Vと書いている。不徹底な自然主義を否定し、社会主義の立場を表明した「時代閉塞の現状」の執筆後間もない時で、自己の命を愛するという考えも、北海道時代よりは遙かに広い視野のもとで認識されていたと思われる。そして、この会話体の評論は、まだ『一握の砂』の校正刷が届けられていない頃に執筆されたのであるが、歌集中の「我を愛する歌」についてこの文章は、あたかも解説を与え、自己主張をしているように理解されるのである。

第二に、「食ふべき詩」は、自然主義文学について触れている。A空想文学に対する倦厭の情と、実生活から獲た多少の経験Vとが、思想と文学とのA新しい運動の精神を享入れる事を得しめ

たVと述べ、散文の自由の国土にあこがれ、A何を書かうといふきまつた事は無くとも、漠然とさういふ考へを以て、私は始終東京の空を恋しがってゐたVと率直に當時を語っている。北海道にいて、A遠くから眺めてみると、自分の脱出して来た家に火事が起つて、見る見る燃え上がるのを、暗い山の上から瞰下すやうな心持があつた。今思つてもその心持が忘れられないVと、ここでも名文句をもつて告白している。啄木はここで、小説と、とくに内容形式にわたつて新しい口語詩とについて語っている。

四十一年、上京するとただちに「菊地君」「病院の窓」を書いた。この二作はいずれも剣路時代に取材した。つづいて「母」「天鵞絨」「二筋の血」と自伝的な小説を書いたが、いずれも懸命な努力にもかかわらず、『中央公論』その他に採用されず、稿料を得ることができなかった。小説家として立つことができるか否かということは、直接生活に関わることである。正当な道と信じる文学の認められない苦悩との重なりあひは、この東京生活に連続する。そのような一夜、短歌の多作が試みられた。

『一握の砂』の短歌は、小説を書くことと深く結びついており、小説が無ければ短歌も無かつたという関係では、副産物のかたちをなし、啄木自身、歌人として立とうとする意欲は持っていなかつたことでもあつたが、その母胎は一つであつた。したがつて、小説に扱われた北海道・故郷での生活は、短歌そのものに歌われた内容の中心をなすのは当然のことであつた。

時が経過した後からみると、啄木の意図したのとは逆に、小説よりも短歌が文学として代表的な位置に据えられるに到つたと

ころに、短歌そのものの問題があつたのである。啄木は「食ふべき詩」でこのことにも触れて、小説の書けなかつたときA恰度夫婦喧嘩をして妻に負けた夫が、理由もなく子供を叱つたり虐めたりするやうな一種の快感を、私は勝手気儘に短歌という一つの詩形を虐使する事に発見したVと述べている。このA虐使Vというのは、『一握の砂』刊行直後に執筆した「歌のいろいろ」の結びにA歌は私の悲しい玩具であるVと言っているのと、まったく同じ意味のものである。この二つの見解は、短歌形式が啄木にとつては、もっとも身についた自然な表現形式であつたことをいうにはかならない。せつばつまつた生活心境に逐いやられた自己を確認するとき、真実の表現は短歌を必要としたのである。

この事実を啄木はしかし十分に意識していた。「一利己主義者と友人との対話」のなかでA形が小さくて、手間暇のいらぬ歌がいちばん便利なのだ。実際便利だからね。歌という詩形をもっているということは、われわれ日本人のすこしきりしかもない幸福のうちの一つだよVという形式についての考え、また内面的に絶えず経験している実感に対して、Aいのちを愛するものはそれを軽蔑することができないVという内容についての考えを、端的に語っている。「食ふべき詩」のなかでも、A詩は所謂詩であつては可けない。人間の感情生活（もっと適当な言葉もあらうと思ふが）の変化の厳密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。従つて断片的でなければならぬ。――ま、とまりがあつてはならぬVと言っているのとも一致する見解であつて、啄木の歌論の中樞をなすものであつた。個人の存在が圧迫されている社会で、わ

ずかに自由をゆるされるものとして、A玩具VはA悲しいVものであり、またA虐使Vをも許されているのであって、短歌は啄木のなかにあって、きわめて高い評価が与えられていたのである。そして、その機能は爆発的な作歌時においては、まったく無意識のうちに多作をさせてしまうほど、身についた形式であったことを物語っている。

啄木の言葉をもってすれば、小説は人ま^まとまりVを持つものであるが、短歌はそれが有つてはならないのである。そのために、かえって小説専念の苦悩を嘗めたときに、人間としての真実を表現することが可能となったのである。今日からみてこの見解が啄木をもって最初とするものではなかったし、一般的な考えにもなっていると思われるが、この時代に統一的に、明快に、自信をもって論じられたのは、啄木の優秀さを示すものであるし、短歌の本質論として将来も忘れられることなく、示唆を与えつつける見解となつていこう。啄木がなぜ『一握の砂』を編むにいたつたか、また『悲しき玩具』をとどめたかを、はっきりと証明する根拠となるのである。これらの短歌に積極的に、また正しい意図をもって実行された口語の使用、平明な表現も、自然主義時代の小説を抜きにしては存在しなかった。『あこがれ』の詩との形式面での相違は、おなじ才能のあらわれとはいえ、短日月の間の驚くべき進展であった。

四

『一握の砂』は三年間のノートに書き溜められた短歌に整理を

与え、再三の編集がえがほどこされて、現在の形態になっている。その点では四十三年の啄木が自作に寄せていた見解を、形態面からも明らかに知ることができる。

全体は「我を愛する歌」「煙一・二」「秋風のころろよさに」「忘れがたき人人一・二」「手套を脱ぐ時」の五篇から成立している。このうち「我を愛する歌」は百五十一首で最高であるが、すでに述べたように、啄木の文学のもっとも中核となるテーマであった。あるいは歌集全体にわたる標題としてもいい性質のものであったことが容易に理解される。「秋風のころろよさに」は五十一首で最少であるが、とくに序文に「明治四十一年秋の記念なり」と添えているので、作歌環境がはっきりと知られる。北海道から上京した最初の年で、故郷の空を想い、岩手山を目に描き、母を想う素直な感情が歌われ、金田一京助のいうように、貧窮のなかにあつてはもっとも安定した生活気分の味わわれたという一時期を反映した歌調を示している。「煙」は百一首で、浜民村が主として取材され、少年時代の憶い出がテーマとなつている。「忘れがたき人人」は百三十三首で、主として函館・釧路時代に取材されている。題名のように人物とその生活とを歌うことは、啄木の開拓した重要なテーマとして注目されるものである。最後の「手套を脱ぐ時」は百十五首で、そのうちの九十七首、および歌集に初出の十一首を新作として加えると、ほとんどすべてが四十三年作ということになる。四十一年秋の一篇と対照的なものであって、その内容は、想い出の歌はきわめて少なく、現実の生活を歌っている。『一握の砂』の中心となる部分で、「食ふべき詩」「時代閉塞

の現状」などの諸評論を踏まえて実行した歌境が、いかなるものであったかを知ることのできる作品を収めているのである。

以上の編集構成をおして知られるのは、最後の一篇を除くと大体が地域的には故郷・北海道が中心となり、自己については少年期から現在までの自伝的なものが中心となり、家や父母などがしばしば対象となっている。このことはさきにも述べたように、小説の主要なテーマと母胎をおなじくしているということができ

る。想い出の発想形式が、内面的なものを一段と純化し、その意味で直接なものとし、小説には組み込まれがたい、まどまりの無い断片が、それゆえに啄木にとっては貴重な真実として表現されているのを知ることができる。このことは、おのずから『一握の砂』が啄木の生涯の文学にとって占める位置を示し、また、短歌という伝統的な詩形の本質的な性格をあきらかに実証した一面をもあわせ示したことになるのである。